

文化高知 45

ふるさとのなまり懐かし

西森久米太郎

平成四年の新春を迎える。新年への想いは希望に満ちたものにちがいない。澄み切った青空、開ける太平洋、豊かな自然と風土、こんなにも素晴らしい故郷なのか……。去年秋は、高知市桂浜に青年の手による「龍馬記念館」が誕生し、日本に誇り得る「館―やかた」がオープン。来年秋には県民待望の美術館も高須に完成し、いよいよ地方文化の創造に向けてフル回転の時期を迎える。地方には独特の文化があり、住民の温かい感性が育まれる。それを完全なまでに表現しているのが「ことば」であろう。つい昨年暮れの東京出張の帰りのモノレール車中での会話である。

このやりとりは、背広とネクタイの似合うスマートな紳士と紳士の会話である。土佐方言には、身なり、習俗、職種を越えて、温かみがある。いまや

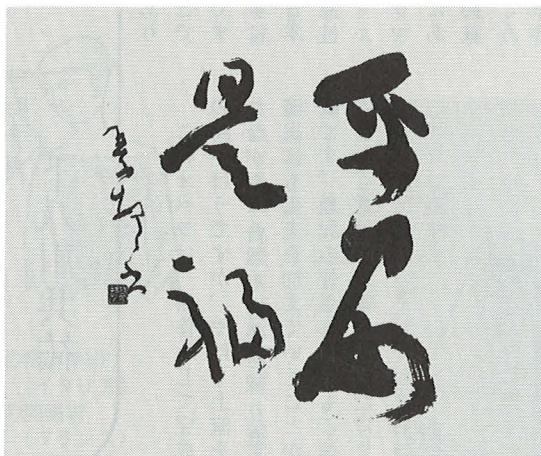
いがしみこんでいる。
浜松町Ⅱ羽田Ⅱ飛行機Ⅱ高知空港……
旅路の人それぞれの住居や仕事、趣味や生きざまも様々だが、耳にする土佐方言の響きは心に安堵をにじませる。「ふるさとのなまりなつかし停車場の……」啄木の一節は、やっぱりどこかに生きている。交通機関の発達、ひところの距離感とカルチャーショックの壁を取り払ったが、方言は、文明が勝てぬ「ゆかしさ」と「ぬくもり」をしつかりと蓄えている。

「アリア！オマン、ドコへ行っちゃったぜよ！」

「ちつくと東京まで。近頃は今朝(けさ)来て、はや、晩は高知じゃきにのー。便利になったのー」

「そおよのー、今晚いんで(帰って)件(くだん)のところてチクトやるかよ。」

「ええのー。ヘンシモ、段取ってみるかよ。」



「平安是福」

川崎翠村

その土地の産物もすべてオールシーズン。TV、ラジオの普及で、言語や文化、風俗までが画一化されてきた昨今、方言には未だに残されたその土地の匂

今なおゆるがせにできない地方文化、それをいま、改めて問いなおし、「文化」の大きなテーマとしたい。そうでなければ、両手ですくった折角の故郷のゆかしい文化遺産が、こぼれてしまうから。
(高知県教育長)

夢は世界の舞台へ

高知が生んだオペラ「よさこい節」

下八川共祐

高知が生んだオペラの秀作「よさこい節」が、去る十月十二日、十三日の両日、県民文化ホールで上演され、大きな感動を呼びました。

昨年の東京初演で高い評価を得てはいましたが、当初からの目標であった地元での初演が成功を収めて、名実ともに画期的な県民オペラが誕生したことになります。

私も高知の出身で、父圭祐の後に継いで音楽の仕事に携わっていることから、五年ほど前に「純信お馬」の物語を地元でオペラ化する企画を伺いました。私どもの団体との共同制作が進められることになり、郷土の意義深い事業を少しでもお手伝いできたことを幸に思っています。

全国各地でオペラの創作・上演活動が盛んですが、地域内での成果は別として、プロのオペラ団体の上演レパートリーになる見込みのある作

品は、滅多に生まれるものではありません。これは地方に限ったことではなく、東京などでも同じ状況ですが、「よさこい節」は、この滅多にない成功作というだけでなく、日本オペラの代表的な作品に育つ可能性さえ考えられます。

「音楽的に高い水準を示し、ドラマの展開に緊張感があり、人間性にあふれ、分かりやすい」、数多く掲載された新聞雑誌評の要点は大体こういうところでは。

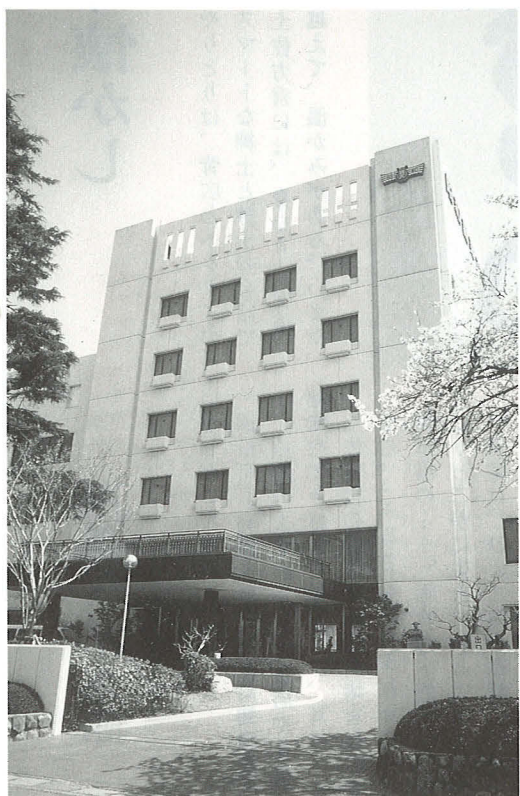
オペラ向きの題材に着眼した企画にはじまり、優れた構想力で練りあげた原作、舞台表現としての効果を高めた台本と作曲、作品の意図を的確に舞台上に実現したスタッフ・キャストにいたるまで、最も望ましい形で総合された成果というべきですが、これを推進した原動力が地元の方々の熱意であったことはいうまでもありません。

このオペラは、新作として完成度の高いほうですが、やはり上演を重ねながら、台本や音楽を練り直し、演出にも工夫を加えていくことが必要です。地元の皆さんからもご遠慮のないご意見をお寄せいただけます。

私もではとりあえず今年の五月二十日と二十一日に、東京・渋谷のオーチャードホールで再演を予定しています。

国内で十分に磨きかけたうえで、やがては海外の舞台へ。この作品は、それだけの努力に値する魅力をもっています。高知の名がオペラを通じて世界に広まるのは素晴らしいことです。オペラのヒロインとして世界の人々に愛されるお馬の姿を夢に描いています。

（財団法人日本オペラ振興会常任理事／学校法人東成学園理事長）



学校法人東成学園昭和音楽大学校

とさこいとは（医学編）

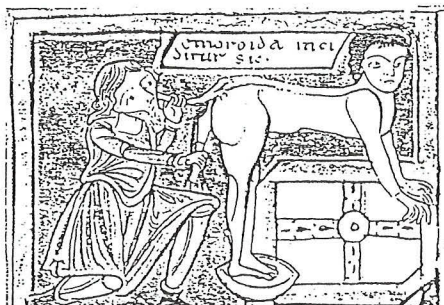
浜垣 仁

私は医者という仕事柄、毎日人に逢う。したがって、一日のうち、座して高知市の人をはじめ、時には室戸・幡多の人などと話をする機会がある。赴任してきた当時、「とさこい」と興味を引かれ、これをマスターしようと思いついた。患者さん理解の捷径となるかと考えたからである。薩摩弁よりフランス語が易しいと聞いて、安心して渡仏した人がいたというが、とさこいにはそれ程の難しさはなかった。診療の途中、お相手下さった患者さんには、思えば大変なご迷惑をおかけしたことになる。

『土和辞典』と題して、とさこい

と標準語の対照表を作り、診療中聞き取った医学用語を書きとめていった。この辞典から、解剖用語・病気の症状・病名と分類して抜き書きしてみる。

まず解剖用語、これは身体のいろいろな場所の呼び名である。曰く、



11世紀頃の瘧の手術 (イタリア)



13世紀頃の開頭術 (フランス) 『図説医学の歴史』(講談社)より

カイガラボネ、オーボネ、センゴウ、ヒラゴシなど。これらの用語の特徴は、一個一個の骨の名称ではなく、大まかに、漠然と、ある部位を表現していることである。

は、外科系疾患の際に聞かれることが多い。このような表現は、繊細・微妙、かつ優しいニュアンスを持った語ばかりである。

さらに病名としては、イビラ、ウミジルシ、スンプク、ツマモレ、イシブ、ヒラギモなどに見るように、非常に分析的なものが多いように思われる。例えば、イシブとは、手または、足の化膿創が原因で、腋窩ま

たは鼠径部に生じた急性化膿性リンパ節炎であり、これらの因果を十分認識した上での呼称と思われる。また、ヒラギモが胆石症を意味するのは、あまたある上腹部痛の中から、胆石発作を選別していることに驚嘆させられる。鋭い洞察である。

言語とは、まさしく文化である。森羅万象を細かく表現できるほど、その国の人は感性が豊かであり、深く大きい文化を有していると思われる。収集した語彙が少なく、結論を出すには早計かもしれないが、解剖用語、症状を表す語句には感覚的なものが多く見られるようである。これは、日本語の特徴であり、土佐において更にこの傾向が助長されている。一方、病名などに見られる分析的表現は、当地に特有のもので、土佐人の議論好きとも、共通する根を持つものではないだろうか。

患者さんとの会話で、時々耳にする言葉、「次郎さんの痔」「鈴木君の頭痛」における「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」の聞き分けは、どの外国語の発音よりも難しく、到底不可能と悟った。

とりあえず今後、感覚的・分析的という点から、土居重俊氏らの労作『高知県方言辞典』を読みわけていってはどうかと考えている。

(医師)

祭の再生

佐藤 恵里

県下の多くの町村が過疎・高齢化の問題を抱えて久しい。神祭も従来通りにはいかず、昔とは異なるあり方が様々に模索されている。若者が主力として芸能奉納やおなばれ等の行事を支えてきた場合、若者層がい

ないから廃止するというのではなく、各地で若者の役を中・高年あるいは子供がつとめることで存続の方途が図られる。私は、この努力を尊いとおもう。神祭はその土地伝承の文化であり、またコミュニティとしての地域の表象である。祭行事を存続させてゆくことが地域づくりと結びついている。土佐山村弘瀬と室戸市佐喜浜町の場合を例に述べたい。

弘瀬では十一月八日が仁井田神社の祭で、おなばれ行事は境内でのチヨイサ台・瓶台の乱舞に始まり、お旅所で練り子の子供と青年による棒つかい・碁盤振り・獅子舞・挾箱・神相撲の諸芸が奉納される。悪病退

散の願かけに起こり三百年前から伝わるという。十月の道具調べから子供に棒つかいを教え、また自身稽古してこの日の行事を担うのが青年の一番のつとめとされてきたが、十五、六歳から二十五歳までの称であった青年が減り、現在十五人中二十代後半は二人のみで三十、四十代の妻子持ちが行っている。ある人は十六で始めてすでに三十年近くやってきたという。練り子も元は男児に限ったのが、少なくなつて女兒を入れるようになった。

佐喜浜町では十月十日が八幡宮の祭で、お旅所の浜宮や境内に立つ棧敷の前で獅子と俄の奉納がある。共に浦居住の若衆のつとめであった。近世以来の若衆宿が昭和四十年（一九六五）に崩壊した後、その統合体の浦青年会が引き受けてきたが、これも数年前に解体し、現在は青年会OBが中心となつている。またこの

触れられている鳴子踊りが若者を惹きつけるのは、この自由で奇抜な意匠を旨とする風流の精神を全面に生かした踊りだからだ。また酒は祭の一方の主役といえる。弘瀬や佐喜浜で男たちは浴びる程の酒を飲む。この酒は祭の日の少年には地域が課した元服の酒でもあった。弘瀬の神相撲、佐喜浜の俄は十五の少年が若者に移るハレの式の意味をもち、彼らは若者のしるしとして酒を飲んだ。これから地域の公事に参加する資格が認められ、一人前として扱ってやるための式の酒である。



土佐山村弘瀬 仁井田神社の祭

間に浦限定をやめ、他の地区の者を入れるようになった。一体、若衆を過ぎて若衆の役をするのは、そうしなければ神祭が神祭にならないからだ。存続の為の必然とはいいながら、この選択は自分たちの代で伝統を変えることの痛みと共に若者がいない土地に対する無念の心を伴っている。けれども、続けることで、次代は確実に育ち、育てられてゆく。

昨年（一九九一年）、弘瀬では「盤持ち石」が新たに登場した。九十キロの力石を持ちあげるとい昔の若衆の願かけに起こり三百年前から伝わるという。十月の道具調べから子供に棒つかいを教え、また自身稽古してこの日の行事を担うのが青年の一番のつとめとされてきたが、十五、六歳から二十五歳までの称であった青年が減り、現在十五人中二十代後半は二人のみで三十、四十代の妻子持ちが行っている。ある人は十六で始めてすでに三十年近くやってきたという。練り子も元は男児に限ったのが、少なくなつて女兒を入れるようになった。佐喜浜町では十月十日が八幡宮の祭で、お旅所の浜宮や境内に立つ棧敷の前で獅子と俄の奉納がある。共に浦居住の若衆のつとめであった。近世以来の若衆宿が昭和四十年（一九六五）に崩壊した後、その統合体の浦青年会が引き受けてきたが、これも数年前に解体し、現在は青年会OBが中心となつている。またこの

五年前になるが、土佐久礼で飲酒の害から中・高校生のおみこく祭への参加を禁じたときいた。若者が減少したから彼らを雇い、しかもこの処置である。現在も続いているかどうか確かめていないが、酒ゆえに未成年を締め出す狭隘な発想がまかり通るところに、祭の伝統の真の衰退があるのだとおもう。私は祭の若者が好きだ。境内の警官詰所前で太鼓を打ちながら春歌をがなつて回った久礼の少年や、俄や獅子の稽古で紅潮する若衆、また鳴子踊りの朝、コンビニエンススト

衆の遊びの復活である。新聞報道で知って駆けつけた他所の老人や中年も挑んで、お旅所の広場が笑い声に包まれたが、練り子らの一段の潑刺があった。彼らは棒つかいの稽古が楽しく、祭を「待ちかねちゅう」ということである。子供は、花笠に思い思いの化粧をした父親のひょうげを見、腰を振る碁盤振りを真似て、力石もやってみる。酒と性的な模擬と哄笑の中で、父親がこの日「青年」に直つてしまふのを体験しているのだ。

佐喜浜でも、今年久し振りに本当の若衆が俄の役者や獅子をつとめた。元青年会長は、「棧敷で見るのは十五年ぶり」といった。宿の長い伝統が、俄の役者にはその年宿入した小若衆（十五、六歳）をというしきたりを生み、宿崩壊後もこれが守られて、祭前になるとまず、「高校生をオワエル」ことが彼らの仕事だった。宿時代の兄若衆と小若衆、あるいはカシラと子分という親密な上下関係が受け継がれていたのである。今回の高校生の登場は、そうやって育てられた小若衆がカシラに成長したことによる。

ところで、「自分に佐喜浜の人間をとり戻すのが神祭だ」といった友人がいる。存続には種々な苦勞が察せられるが、この全体性の回復があるところから、祭の再生を果たしてゆくのだとおもう。過疎の状況下で行事を担ってゆくかかつての若衆たちに敬意を表したい。（高知女子大学助教授）

まちづくりという点、行政や専門家によって計画、実行されるものというイメージが強い。なぜなら、法律や都市計画など住民に知らされる情報は非常に限られており、住民の意見を反映させるためのシステムも確立されていないからである。そしてこのことは、住民がまちづくりに関心を持つことになり、環境をもち出しているのではな

ら、神祭は毎年新たに続いてきたし、続いてゆくのだと考たい。神ごとの中で一同が飲み、食べ、遊ぶという三つを完全に備えたのが祭であろう。これが伝統の核を形成している。遊びとしての芸能は本来大きな許容力を持っている。弘瀬のひょうげや佐喜浜の俄は、大まかな約束事の中でその年の工夫が眼目にある。芸能史では中世から近世にわたり庶民を熱狂させた風流の系に立つ。因みに「高知の文化を考える」にも俄と共に伝統の保存と発展の視点から

不足を解消し、行政への提案ができるようになっていく。また、行政や企業にとつても、住民との対話によって、住民の多様な視点や、住民が何を求めているかを知ることができる。こうして、とかく行政や企業の力が強く現れがちであったまちづくりを、住民が参加することで三者のバランスを保ちながら、住民主体のまちづくりを進めようとしている。

この方法は、行政が計画してそれをそのまま実行するところからこれまでの方法に比べて、非常に多くの時間と手間がかかる。住民との意見調整、計画の練り直しなど、行

住民主体のまちづくりを

～世田谷区のまちづくりセンター～

政の負担は並大抵のものではないだろう。しかし世田谷区はあえてこの手間をかけようとしているのである。ここには、「住民のための行政」といった思想がある。行政が地域の住民の中に入って、一緒にまちづくりを進めているのである。こうした地道な努力が、住民の自治意識を高め、

ただでなく、縦割り行政の弊害の解消や職員の高質向上に向けて様々な工夫を行っている。そして住民も、自分たちの街をどう

つとめてゆくかを討議して行政に提言したり、公園の自主管理をするなど積極的にかまちづくりに参加している。このように住民との信頼関係を獲得し、柔軟な対応がなされる行政とそつでない行政では、今後のまちづくりの進展に大きな差が生ずるのではないかと。これまでのように「行政はハードさえ作っておれば良い」と考えるのは、住民と行政の相互の信頼関係を放棄し、物は豊かでも味のない、し

他に誇りうる歴史遺産を持つ我が高知市も、住民と行政が対話を重ね、まちづくりに対する思想を構築し、味わいのある街へと発展してほしいものである。

先祖まつり (二)

依光 裕

高知市の西郊にあたる本宮町と上本宮町に古くから住む「河野氏」一族のルーツは、瀬戸内海の内海と関係することになっており、春秋の二回、先祖まつりを行っている。

この「河野先祖」のまつりの日、一族の長老たちの話は続く：

わしが十歳ばアの頃じゃったきに、明治三十三、四年のことじゃったろう。

わしが家に古味万左衛門という人が鎌棒にきよった。鎌棒というのは、自前の鎌と稲の束を刺してかつぐサスという棒を持って百姓の家に住み込む季節労働者のことでのう。

この万左衛門という人は元々、佐川の郷士じゃった人で、なぜか落ちて鎌棒になったわけじゃが、五十五、六のその人が、毎晩わしを膝の上のせて繰り返し、捲き返し話

ら刺し違えたが、永瀬は負傷で弱っていたためか手もとが狂い、林は死にきれない。そばにいた野村駒四郎が林の首を打ち落した。

大月博志著・秋の傷痕 (歴史読本)

一族の長老たちの話は更に続く。

このあたりで米の二期作が始まったは大正になってからじゃった。

二期作は香長平野が本場じゃったが、その技術を他所へなかなか教えない。それで、わしがその技術を盗みに行た、鎌棒になって。

鏡川橋から電車に乗って終点の御免駅へ着くと、そこには鎌棒を雇い入れる百姓の旦那衆がズラリと並んで待ち受けちよった。わしが入ったは、日章の島内という大百姓の家じゃった。二十人からの鎌棒が居ったが、なぜか、わしはそこなジンマさんがうんと目をかけてくれた。

「兄はどこから来たぞ？」
「やア、戸波でございます」
「牛は使えるか？」

「いんげ、使えません。戸波は牛耕じゃのうて馬ですきに」
わしが「牛が使える」と言うたら戸波の人間じゃないことが分かるろ

をしてくれたが「迅衝隊」の一員として、会津若松城へ突入した日のことじゃった。

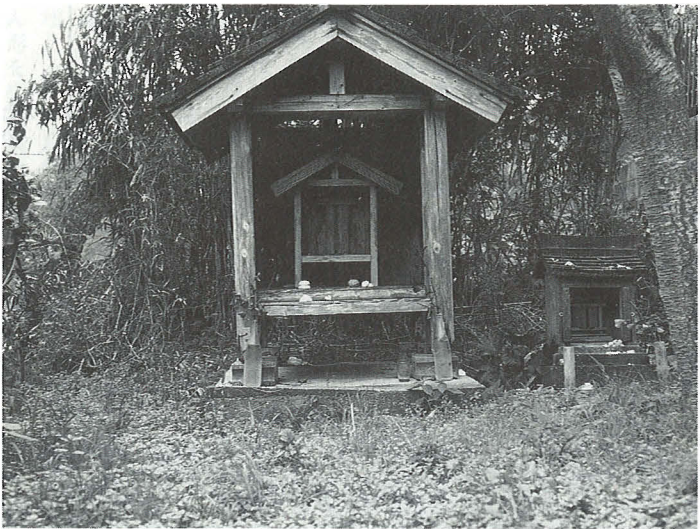
※ 迅衝隊

板垣退助を大隊司令として慶応四年(一八六八)に編成された土佐藩の歩兵大隊。郷士を中核として軽格武士で構成され、兵員は六百人。甲州勝沼で近藤勇の甲陽鎮撫隊を撃破して第一戦を飾り、安塚、今市など関東各地を転戦。ついに奥州に進んで白河、二本松攻撃に参加、会津若松城を囲み、九月二十二日、その落城まで戦闘を続けた。(高知県百科事典)

土佐藩の迅衝隊が会津若松城へ突入したは慶応四年八月二十三日のことじゃった。

う、それで、そう言った。コチは牛を使うはお手のもんじゃが、それが言えん。

飯は鎌棒は板の間、島内の人は上段の座敷で日に四回食えたことじゃった。



大三島神社を勧請したという氏神

わしが甲賀町の郭門を目指して走りよるに、目の前に一人の侍が倒れてゴゴゴしよる。

見れば年の頃、十六、七の敵方の若侍で、右足の踝を鉄砲玉で撃ち砕かれて、いかにも苦しそうじゃった。

そこで、わしは「武士の情じゃ、苦しまんようにトドメを刺しちやろ」と刀を抜いて寄って行くに、どっかい相手は刀を杖に立ち上がると、左手の鉄扇を前へ突き出し、右手の刀を振りかざして名乗りを上げた。

「会津藩士、白虎隊・永瀬雄治ノ参れッ」
そこで、わしも名乗った。

「土州藩士、迅衝隊・古味万左衛門ノ参るッ」

一太刀でと思うて撃ち込むに、相手は鉄扇でわしの刀を払うも振りかざしちよった刀をいきなり撃ちおろしてきた。これが、なかなか鋭い太刀筋じゃ。

「なにおっ」と思うて、わしがまた斬り込む。左手の鉄扇でパンと払うて相手の刀がビュッとくる。くるけれど、相手は右足の踝を砕かれちよるきに、よう踏み込んでこん。

これが四、五回続いたが、わしは相手をようやつけん。やつつけどころか、相手はなかなか手強わうて、下手すると、こつちがやられかねん。仲間はずんぞん前へ進みゆし、

漕げんことがあるかの、コチャ、浦戸湾の投網打ちじゃに。

「教えちやるきに、ボラ漁の供をしたや」

そこで鎌棒の仕事をせんと、毎日、ボラ漁のお供をする事になったが、

ジンマさんの投網は十八尋しかない。それに力が弱つちゆうきに網が飛ばん。

「えれ糞、兄は網が打てんか？」

「やア、打てません」

「その五体ならなんぼか網が飛ぶろう。教えちやるきに打つてみた」

四、五回習うて打つた。打つたところが投網打ちの地が出てボラの群れへバツサリ!

ボラの群れへバツサリ打ちかぶせるも、隠居が舟の中で躍り上がって、こう言うた。

「兄はスジがえいノ在所は戸波じゃのうて川筋じゃろが!!」

ジンマさんは、わしが二期作の技術を盗みに入つたを見抜いちよって、それで鎌棒の仕事させざつたがよ。

(RKC高知放送企画事業局長)

「こがいな相手にや取り合わんが勝ちじゃ」と思うて、

「命を粗末にすなよッ」

と、声を掛けて、相手から擦り抜けるも声が飛んできた。

「敵にうしろを見せるかッ」

こちらも侍の端くれじゃきに、そう言われては前に進めん。引っ返して斬りつけたが、同じことよ。そこで、また擦り抜けるに今度は「卑怯者ノ返せ、返せッ」

ときた。わしはそれへ、

「聞こえん、聞こえんッ」

と怒鳴り返して、走り抜けたことじゃった。

先年のこと思いたつて迅衝隊当時の仲間の慰霊の旅に出てのう。会津へ行たついでに飯盛山の白虎隊の墓詣りをしたところが、なんと石塔の一つに永瀬雄治の名があつた。

あの砕けた踝の足で、どうやって仲間と合流したろうと、その時にかそう思った。

永瀬雄治は無傷じゃなかつたぞよ。

※ 林八十治(十六歳)と永瀬雄治(十六歳)は同い年で、日頃から親しかった。

死なば共に、と平常からの約束どおり、林は刀を永瀬の胸にあて、永瀬は林の咽に刀をあてて、一時に声をかけなが

土居重俊監修
高知市文化振興事業団編
土佐弁 土佐日記
岡林清水著

高知県文学散歩
高知の文化を考える会編
定価一、二〇〇円

高知の文化を考える
高知の文化を考える会編
定価一、二〇〇円

わがまち百景
高知市文化振興事業団編
定価一、二〇〇円

高知の森林
高知県緑の環境会議森林研究会編
定価一、五〇〇円

画帳の歳月
筒井広道著
定価二、〇〇〇円

流れと波の科学
上森千秋著
定価一、五〇〇円

土佐日記
土居重俊著
定価一、一八〇円

高知県方言辞典
土居重俊・浜田数義編
定価六、〇〇〇円

土佐の芸能
高木啓夫著
定価四、八〇〇円

中山高陽
清水孝之著
定価三、八〇〇円

土佐自由民権資料集
外崎光広編
定価三、〇〇〇円

明日を創る
大谷英二著(高知レポート1)
定価一、〇〇〇円

今井嘉彦著(高知レポート2)
河川はよみがえるか
定価一、〇〇〇円

外崎光広著(高知レポート4)
土佐の自由民権運動
定価一、〇〇〇円

*は税抜き価格です

お申し込みは最寄の書店か事業団まで

写真は心の移絵

うっしえ

川添 寛

写真を撮ることは、個人的で特異な観念を視覚化すること。被写体が同じであっても、撮る人がかわれば全く似ても似つかぬ撮り方をするので、個人的で多様な解釈をブレンドし、一枚の写真としてまとめあげる。また同様に、写真を見る場合も反応という点で特異性を示すものである。いずれにしても個々の主観の違いによって、表現や評価が著しく異なったものとなるし、この個人差が実は写真というものの活力の源泉でもある。

私の場合どうかというと、論理的に検討する時と、ほとんど直観だけで写真をつくってしまう時と、やはり両面を持っている。前者は本来、私流ではないのだが、写真が現在ののようにマスメディアの一部として大量に利用され、その中で仕事をしているら、多数の人々の間で種々の検討を加える必要が生じる。そのためには論理的な方法が進行上理解しやすいからである。検討を加える時間的な違いはあるが、どちらの場合も私の写真づくりのための思考ダイアグラムの中で様々な問いかけがなされることには違いがない。問いかけは写真の存在座標ともいべきものと絡ませ



「つぼみ」

ながら、選択と増幅を行うのである。今、一枚の写真の存在を考えてみる。道具としてのカメラ機能、映像の実体としての被写体、撮る人の技能・構想力・芸術意欲、そして重要な目的。この四つの要素を頂点としたピラミッド型の空間に、それぞれの力のバランスに支えられた状態で写真は存在する。透明なこの座標を基に、どのような種類の写真をつくりたいのか。いかなる意図をもってカメラを使おうとしているのか。写真を撮る媒体として伝えたいのはメッセージなのか。ムードとかフィーリングなのか。カタログの説明なのか。それとも被写体に特別な価値を与えることなのか。どの要素を積極的に増幅するのか。様々な問いかけを通して、自己投影としての等価イメージを固定化させるのである。

プラトンは芸術の根源を「神の狂気」であるとし、アリストテレスは「見る人の心理的反応をうながす手段である」と称した。多くの哲学者たちが今までに、芸術に共通する分母を定義しようと様々な概念を導入したが、未だ芸術の本質がなんであるかが立証されていないように、写真にも拘束される美学上の絶対的な法則はない。ともかく私にとって写真は、全体として湧き出してくる感情や心のエキバレンスであり、移絵である。

(日本写真家協会会員)

土佐の芸能10選 ⑩

国境の二十日念仏

高岡郡檮原町越知面

高木 啓夫

四万十川の流れの湧き出で、それがまだ小さなせせらぎの音をかなでているところに越知面の里がある。国境の山懐にうづくまる静かな里である。

静かなこの里に、毎年八月二十日になると、鉦と太鼓とが鳴り響く。かに念仏の音が漂ってくる。称して「二十日念仏」である。昭和四十年のこと、里人のほとんどが赤痢にかかり隔離されるという出来事があった。折しも三年前から、この「二十日念仏」を中止しているときであった。「やっぱり、お念仏を怠ったからじゃ」ということになって、それまで二十日、二十一日の両日にわたって行ってきたお念仏を、二十日限りとして再び行われるようになった。この二十日念仏の復活の話もさながら、二十日念仏の始原にかかわる話も不思議なものであった。



長さ1mはある大きな団扇を頭にのせて念仏を復唱する

高岡郡山岳地帯は延喜十三年(九一三)津野経高の入国以来、慶長五年(一六〇〇)津野氏へ養子に來いた長宗我部元親の三男津野親忠の自刃による津野家断絶まで、津野氏の領するところであった。



袴姿に威儀を正す村役
その前で跳びはねて踊るトビ太鼓

これより三年前の慶長二年には越知面城主中越長左衛門正友が、キリシタンであることを理由に、村人たちに惨殺されたと伝える。

このところから不作は続き、疫病は流行り、里人の生活は困窮と不安との明け暮れであった。城主長左衛門正友、領主親忠の死、それもただならぬ非業の死への想いが里人の心に宿りはじめていたのである。

慶長九年八月、善福寺に「津野神社大前」「中越長左衛門正友神社」「弘法大師尊前」の大きな幟が立ち並び、三日間にわたる大供養が行われたのである。十九日親忠、二十日正友、二十一日弘法大師への供養であった。

寺の本堂には村の役人が袴姿で威儀を正して座すると、袴姿に一字笠を被って鉦打ち、これも袴姿の団扇振り、そして脚絆姿に鳥毛を被り胸に縮太鼓をくりつけたトビ太鼓の一行が列をなしながら境内に練り込んでくる。

鉦と太鼓の音に誘われるように、境内を巡り行きながら、大きな長方形の隊型を描き出す。大団扇は相対し、鉦役とトビ太鼓とが相対して位置すると、念仏の合唱が国境の青い空に漂い出る。

一方の大団扇がナミアミドンボーと唱えて大団扇を打ち振れば、対する大団扇が同じ仕草で、同じ念仏を復唱する。南無阿弥陀仏の念仏が基調であるが、この唱和には緩急強弱の流れるが如き旋律がある。この美しき調べの念仏唱和によって西方浄土を観想し、心の平安を得ようとしたのである。

こうした大念仏は檮原町吉祥寺、東津野村宮谷明王寺、幡多郡十和村古城大師堂、地芳吉祥寺、宿毛市平田町藤村寺にもその面影を伝えており、高知県西部の盆の芸能として特記すべきものであるばかりか、土佐を代表する花取踊りの源流を偲ばせるものとしても注目すべき芸能でもある。

(高知県立高知工業高等学校教諭)

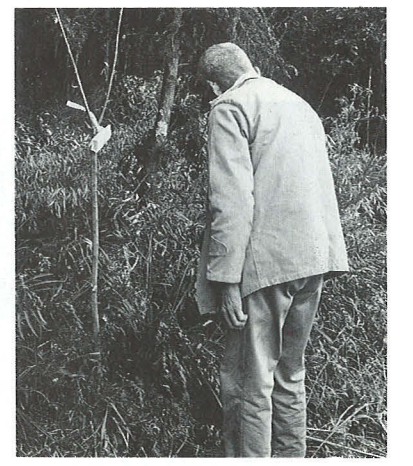
仕事はじめ

坂本正夫

昔から年の始めには一年中の仕事に調子よく、そのさいさを祝う慣習があった。これは職業、仕事の種類、地域によって正月二日前後、四日前後、十一日前後に変わっていた。

農作業の仕事は初め、打ち初め、農はじめなどいい、二日に行くことが多いが元旦に行くこともあった。たとえば吾川郡吾川村上名野川では、二日の朝早く近くの畑へ出掛け松の小枝とすきを四、五本立て、大豆を五、六粒蒔いて戸主が三鍬打ち、主婦がそれを鎌で刈り取る所作をする。つづいてお神酒、干し柿、ナマグサ(魚)などを供え、その場で家族一同がお神酒をいただいていた。

鍬初めはどこでも明きの方(その年の吉の方角)の田や畑、庭の隅などへ松、樫、椎などの小枝を立て、それに神酒、餅、干し柿、お注連などを供えて正月神を祀り、戸主が二鍬、三鍬打つ真似ごとをしていた。山間部の土佐郡土佐町瀬戸では二日の朝早く明きの方の麦畑へ出掛け、「今年の麦はようできたぞお」と大声で麦ほめをしてから三鍬ぐらい畑を打っていた。東部の室戸市郷では十一日に今年の苗代にする田に松の



山の口あけ(1974年 土佐郡鏡村)

小枝とすきを立て、それに裏白、鏡餅、米、雑煮、お神酒などを供えて地ほめをしていたが、所有する田が二ヶ所あれば二本、三ヶ所あれば三本の松とすきを立てていた。

長岡郡大豊町桃原では、二日に屋敷(同族)の者たちが本家に集まって泊り初めをしていた。大正期以降は朝集まって囲炉裏端で飯寝をして仕事ははじめをしてきたが、これは本家による労働統制の名残りだと思われる。

二日には初荷、買初め、倉の開け初め(鏡開き)なども行われていた。農村では牛馬の出し初めをしたり、米の搗き初めをする所もあった。漁村では船の出し初めをし、どんな魚でも一尾釣り上げて帰っていた。山の仕事はじめは山の口あけ、切り初め、山初めなどいい、四日に



鍬初め(1974年 土佐郡鏡村)

行く所が多かったが、十一日に行く所もあった。戸主が家の近くの明きの方の山へ神酒、餅、ナマグサ、干し柿などを持参して薪の切り初めをし、二、三本の薪を持ち帰っていた。正月十一日はコウセン正月、粉初め、ハタキ初めなどと呼ばれ、門松に掛けた注連の稲穂を粉にして正月神に供えていた。幡多地方ではこの日をナイゾメといい、今年使用する縄のない初めをする家もあった。

以前の農村では正月の神さまが家に居る間は仕事をしなかった。正月神は二十日ごろまで滞在するので、二十日正月が正月行事の最終だと考えられていた。だから正月には皆がのんびりと過ごして正月神を祀るが、ただ一度だけ田や畑や山へ入り、作業の真似ごとをする仕事はじめが全国共通にみられた。
(高知県立小津高等学校教諭)

第6回高知の映像コンテスト入賞作品



高知を撮る

大漁

山崎房好

生酔の礼者をみれば大道を

横すぢかひに春は来にけり

(蜀山人)

新春にこうした風情も少なくなつたが、狂歌で有名な江戸後期の文人蜀山人は、節句と祝儀のとき、珍客が来たとき、酒菜あるとき、月見、雪見、花見のとき、二日酔いのときに、酒を飲むべしといっている。

ここでは、酒を規制するよりも、のべつまくなし飲むことになるのではないかと思われるのだが、さすがに気がひけたとみえて、一日中呑むのはいけないともいっている。

多能な人で、狂歌のほか狂詩、狂文、酒落本、黄表紙、滑稽本の作者としても活躍した。江戸の市民文芸における先案内人を果たした人で、安永末年には文芸界の中心的存在になった。だが松平定信の文武奨励政治が始まると、文芸界と絶縁して、人材登用試験に首席で合格して幕吏となった。やがてま

酒



風俗歳時記

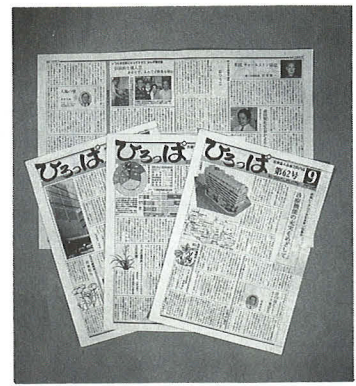
た文芸活動をするようになる。晩年は江戸を代表する文化人として、高く評価された。
さて、酒の話に戻って、古来酒は神聖な神への捧げもので、かつてはハレの日のみ酒を呑んだ。そして普段の苦、労を忘れ、うさを酔いで洗い、特別の喜びを感じて明日への活力を養った。それが何時のころからか、ハレでもケでも酒を呑み、なにか理由をみつければ酒を呑むようになる。

一方、酒の上のこと」という弁解があり、酒席の場合の過ちは許されるか、斟酌される。だが、これは日本だけのこと、外国のビジネス社会には「無礼講」という感覚はない。

「酒のつえのこと」として、逃げるとは許されない。
三ツツ語の諺に「酒中に真あり」と言つのがあろうだが、せめて正月の酒くらいは、「酒中に真」を求めて呑むべきか。
(晋)

皆さんとの懸け橋として

平野 政夫



「ひろっば」という誌名は、はらっばや広場という意味があります。むかしは街角のあちこちに雑草が生えた空き地があつて、こどもたちの元気な声が聞こえて

ていました。いまではこうした自由なあそび空間も、公園化されてしまいました。が、「ひろっば」はこんな自由な広場を提供し、職員たちの交流を図るために昭和六十一年の八月に創刊されました。以来いちども休刊することなく、この十二月号で六十五号目になります。創刊当初から四頁ないし六頁建てとしていましたが、編集スタッフは、毎号いかに記事を削るかという苦労が絶えません。「ひろっば」創刊は、病院改革の時期とも重なり、近森病院本館増改築、基準看護の導入、近森リハビリテーション病院の開院など、話題には事欠きませんでした。

古楽器の魔力にひかれて

横田 稔

コンサートとは同一楽器で演奏するのですが、イギリスのチューダ王朝期エリザベス一世治下に盛んに貴族達によって楽しまれていた演奏法でした。

ドーナツ・アンサンブルは、ヴィオラ・ダ・ガンバというルネサンス初期に登場、一八世紀中葉に姿を消した弦楽器でコンサートを楽しむ集いです。毎週末曜日、仕事と夕食の終わった八時頃から集まり、十二時頃まで弾いていますが、聴く者は苦痛で最後には眠気に襲われてしまいます。しかし、一度楽器を持ち弾き始めると、誰が制しても止めることができない魔力をもった楽器です。

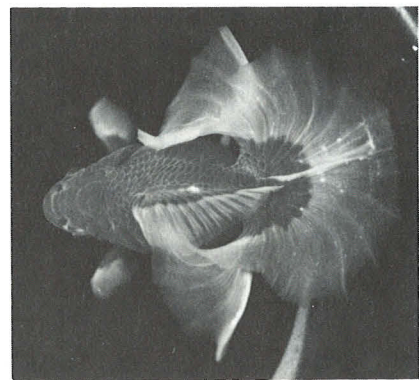


ヴィオラ・ダ・ガンバは六弦で弓をもつて弾きます。ギターのようにフレットがあるので、初心者で楽譜を読めない人でも音階が簡単にとれ、易しい曲は三カ月もあれば皆と弾くことができます。

土佐金魚愛好会

より美しく、より豪快さを求めて

野中 純男



県の天然記念物にも指定されている土佐金は、弘化二年頃から須賀家で飼育され、昭和の初め頃とおもいますが、亀太郎さんの時代になって完成されたといわ

れています。オオサカランチュウとリュウキンの交配であり、固定して日が浅く、金魚の王様といわれながら良い魚がなかなかできず、また飼育の難しいといわれる理由の一つにもなっています。南海地震では一時絶滅しかけたましたが、田村広衛さんにより救われました。私たちの愛好会は、この土佐で生まれた気品の高い土佐金の魅力にとりつかれた者の集まりで、新しく五年前に結成しました。現在約二十名の会員が、熱心に産卵、選別等子引きを指導し、年二回の品評会（八月と十月の第三日曜日に九反田公園にて）も行つて、より美、よ

「下知広域婦人学級」

教養の向上と親睦を

畑山 文子



下知広域婦人学級は、昭和四十六年下知市民図書館が建設され、この文化センターの活動の一つとして「下知消費学級」で発足し、昭和四十七年三月から中央公民館の開設する広域婦人学級となり、婦人の教養の向上と親睦をモットーに今年で二十年になります。

下知地区の家庭の婦人が殆どですが、若い人は子育てと郊外への転出など、また仕事をもち人が多くなり、学級生の年齢が次第に高くなって来ました。人集めに苦労した頃もありましたが、何とか五十名位の人数でもちこたえて現在に至っています。頭がさびつかない様に社会に目を向けようと、話し合いで学習計画を考え希望の多い課題を決める様にしています。時事問題、消費者問題、身近かな法律、健康に暮すには、

散歩の途中で



城西公園西詰江ノロ川沿に「江ノロ川清流復活シンボル塔」が建つ。鏡川とほぼ平行に市内を東西に流れるこの川は、時代の流れの中で、工業廃水、生活廃水に汚染され、へドロ状の悪臭を放つ死の川と化していた。しかし、五十年代後半より、高知青年会議所や流域町内会などが中心になり、清流を取り戻す様々な試みがなされ、今では魚影を楽しむことができる。

風伯

入試哀愁

銀杏並木が黄金に色づくころになると、決まって胸に何か凝りのようなものもたげてきて、はて、その正体は何だろうと思いつく。大学受験を目前に苦悶した己の姿が浮かび上がってくる。小生の友人の一人はこう語る。

受験という名の「戦争」の傷痕は、四半世紀を過ぎてさえ、四季のうつろいに投影して思ひ出されるというわけである。件の友人は、無気力を絵に描いたような人物である。彼は自らのことを受験戦争の敗残兵だといふ。しかし彼の場合は、大学受験に

ケーションの広場として出発した「ひろっば」も、いまでは患者さんやそのご家族の方々と病院との懸け橋としての役割も大きくなってきています。平成四年の新年号からは文字や写真も大きく見やすくし、八頁建てとして誌面を刷新する予定です。これからも地域の方々とともに歩む病院の広報誌として、親しまれ愛される内容を心掛けていきたいと思っております。

連絡先 高知市大川筋一丁目一六
近森病院内「ひろっば」編集室
電話 〇八八八―二一五二三一

メンバーは現在十名、専門家の参加が一名もないという誇りとレベルの自覚をもつて楽しんでいます。高知市はアンサンブルを楽しむには適した大きさと地勢です。それは車で三十分も走れば集まることができます。近頃の交流は容易でないことが却って遊びはすべて自前で賄うこととなります。近頃は情報入手も簡単、井の中の蛙は意を強くして大いに居心地をよくすることができると集まっています。

連絡先 高知市百石町一―一七―二五
電話 〇八八八―三三―五〇〇五

り豪快な土佐金づくりにと頑張っています。現在、東京や九州宮崎にも愛好会ができていますが、何といつても強烈な太陽が輝き、青く澄みきった空の土佐は、土佐金を育てるには最高の条件を備えています。見れば見るほど美しい土佐金を飼い、土佐に住んで土佐金を知らない、ということのない土佐人になってほしいものです。

連絡先 高知市東雲町一―一五
電話 〇八八八―八二―七六五五

土佐の薬草、文学などと盛り沢山を選び、それぞれの講師を招いて学習をし、また料理実習や手芸、遠足、史跡めぐり、お正月生け花と実生活にすぐ役立つ学習もしています。色々の先生方との出会い、自分一人では聞かない話、出来にくい事、行けない所の探訪・見学など、みんなと一緒に出来ることはすばらしい事だと思えます。これからもみんなで仲良く長く続けていきたいと願っています。

連絡先 高知市二葉町九―二四
電話 〇八八八―八二―八八三八

第8回高知市都市美デザイン賞

推薦募集締切：平成4年1月31日(金)

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなど推薦してください。

〔対象〕平成3年1月1日から平成3年12月31日までの間に高知市内で完工した建築物や建造物。

〔推薦〕どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

〔表彰〕特賞1点・入賞2点

〔送り先・問い合わせ先〕

〒780 高知市本町5-2-3 電話0888-73-4365

高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

第8回高知の映像コンテスト 写真展・高知を撮る 作品募集

応募締切：平成4年1月31日(金)

事業団では、第8回高知の映像コンテスト〈写真展・高知を撮る〉と題して、高知を題材にした写真を募集しています。この写真展は、過去から現在にいたるまでの高知県内の出来事や暮らしなどを写真でふりかえり、高知の表情を知ろうというものです。

すでになくなってしまった懐かしい風景や将来もずっと残しておきたい風景、変わりゆく高知をとらえた写真などをお寄せください。

〔テーマ〕「高知を撮る」

高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

- 〔応募〕
- *どなたでも、一人何点でも応募できます。
 - *四ツ切り以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。
 - *その他詳しく応募要領は事業団までお問い合わせください。

- 〔賞〕
- 特選 2点(賞状と賞金5万円・副賞)
 - 準特選15点(賞状と賞金1万円・副賞)
 - 入選 100点以内

〔作品展〕平成4年3月上旬

とでん西武にて開催予定

〔応募先〕*高知市文化振興事業団(〒780 高知市本町5丁目2-3 電話0888-73-4365)

*高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

高知出版学術賞 推薦受付

優れた学術研究は、地域の発展と密接に関わり、その成果ともいえる出版物は文化や出版の向上だけでなく、地域の発展の種子となります。「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。

皆様のご推薦をお待ちします。

〔対象〕

- ① 高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。
- ② 一九九一年中(奥付の日付による)に発行された単行本。

〔推薦〕

自薦、他薦は問いません。推薦図書名、著者・編者氏名・連絡先、出版社名、推薦理由、推薦者の氏名・連絡先を書いた所定の推薦書に、該当図書二部を添え、審査委員会まで提出して下さい。

〔受付期間〕

一九九一年十二月十日～一九九二年一月三十一日

〔表彰〕

三点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金十万円を贈ります。

*推薦・お問い合わせは、文化振興事業団内、高知出版学術賞審査委員会までお願いします。

理事長に橋井昭六氏

山岡前理事長逝去に伴い役員改選を行い、十二月三日の理事会で以下の通り決定しました。

理事長 橋井 昭六
副理事長 池川 順子